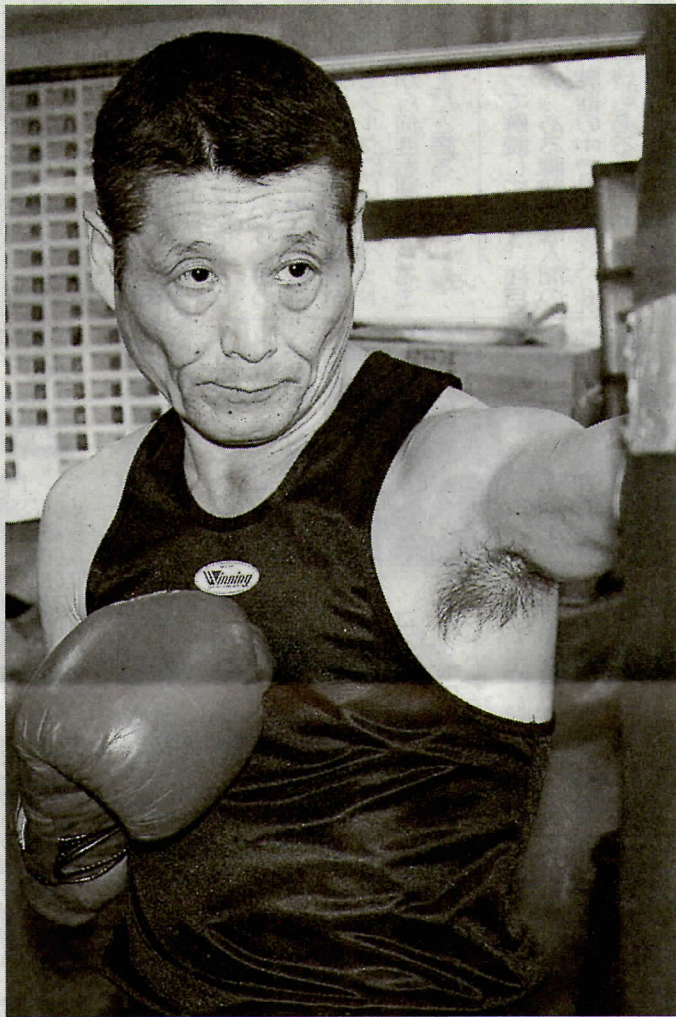


「戦うことあきらめない」



「体が動く限りリングに上がる」と話す清酒さん（大阪市東成区で）

元プロボクサー・清酒さん

がん乗り越え、アマ大会出場

胃がんを乗り越え、若い頃に断念したリングに再び戻って戦い続ける61歳の元プロボクサーがいる。大阪市淀川区の貸しビル業・清酒直一さん。中高年のボクシング経験者を対象にしたアマチュア大会に5回出場。手術で体力が落ちた身に練習はこたえるが、「体が動く限りリングに上がり続け、がんと闘う人を勇気づけたい」と意気込んでいる。（斎藤七月）

清酒さんは19歳の時、男の「世界」に憧れ、大阪市内のジムの門をたたいた。毎日、家業の豆腐店の仕事帰りに練習し、22歳でプロ試験に合格、西日本ミドル級の新人王となった。しかし、3年後、所属ジムが解散し、

経営を始めた本業の弁当屋も忙しくなり、リングを去った。

胃がんが見つかったのは50歳の時。胃の鈍痛が続き、受診すると、胃がんを宣告され、「発見が遅れていれば余命は3か月だった」と言われた。胃の全摘手術を受け、やがて回復はしたが、思うように食べることが出来ず、体重は80キから64キに減った。3年ほど前、本

屋で偶然手にしたボクシング専門誌で、33歳以上の元プロボクサーや練習生を対象にした「OSF青春ファイトIN大阪」の存在を知った。少ないラウンド数で、ヘッドギアもつけて試合する。

「もう一度リングに上がるかも。一度はあきらめかけた命。やりたいことをやろう」。体調を心配して反対する妻を説得し、主催する陽光アダチボクシングジム（大阪市東成区）に連絡した。

だが、練習は思った以上に体にこたえた。手術の影響による貧血で、歩くだけでもフラフラ、縄跳びをしてはひざがガクガク。練習の後は数日間、全身が痛くて動くことも出来ず、初戦の08年の大会は、まともな攻撃が出来ずに敗退した。「青春の夢をあきらめてなるものか」。マグロやカ

ツオなど赤身を中心に食べるなど食事も徹底管理。週2、3回のジムでの練習と、毎朝のランニングで体力を取り戻すことに努めた。

次第にフットワークとジヤブのリズムが良くなり、09年以降に出場した大会はいずれも勝利。11月6日に大阪市で開催された大会でも、56歳の選手を相手に右ストレートを決めるなどし、見事勝利を収めた。技能賞も受賞した。

同ジムの安達哲夫会長（65）は「自己管理が徹底しており、若い訓練生の見本となる。また、病気を抱えながらも頑張る姿は、同世代に希望を与えてくれている」とたたえる。現在、大会出場者で最高齢の清酒さん。来年の大会にも出る予定だ。「がんを患っても、年齢が上がっても、やろうという気持ちがあり、あきらめなければ出来る」と話す。